

グローバル通信

2013.12 vol.31

Ryukoku University
GLOCAL TSUSHIN

早いものであっという間に師走です。月日のたつ早さを感じるこの季節、修士論文の作成に忙しい院生達の姿。一年先の院生達も自分の来年の姿を重ねあわせます。修士論文ということは修了も間近に迫ってきたということ。仲間達との時間もあと少しです。今回のグローバル通信は、そんな過程を経てきた先輩たちのお話を聞きます。そして、海外フィールド研究と、JICA 集団研修の報告、海外調査に行かれた先生のお話と、海外の話題が豊富な企画となっています。百聞は一見にしかずの実体験は新たな発見をもたらしてくれます。本コースの10周年記念シンポジウムも成功裡に終わりました。今号は速報ですが、次号でくわしく報告します。院生の動きも慌ただしくなっているこの時期は、インフルエンザの流行る時期でもあります。身体に気をつけて、無事にこの季節を乗り越えましょう。(編集部)

カルチャー・ツーリズムのすすめ	1
より政策形成の質を高めるための地域政策協定を結びました	1
修士論文執筆記(アンケートから)	2
アメリカ・コミュニティ財団の動向調査から	3
JICA 集団研修「地方行政強化(参加型地域開発)」から	3
龍谷大学院 NPO・地方行政研究コース 10周年記念シンポジウム 地域公共人材の挑戦一枠を超え、今を越えるー	3
海外フィールドワーク 報告	4
あの人は今	4
事務局インフォメーション	4



カルチャー・ツーリズムのすすめ

(社団法人) 奈良まちづくりセンター
二十軒 起夫 (2008年度修了)

(社) 奈良まちづくりセンターにおける最近の話題を紹介いたします。10月に、香港大学で文化財保存学を専攻する大学院生が2名、奈良と香港の観光政策と町並み保全について調査し、修士論文にまとめるため、奈良まちづくりセンターに国際研修生として訪れました。彼らは社会企業コンサルタントとして活躍するとともに、大学院で学んでいます。奈良では外国人の視点から奈良の観光を見つめるという興味深い調査を行ない、奈良と香港の観光のあり方と、香港における伝統的町並みの保存方策について提言を行いました。100年間イギリスの植民地であった香港で生まれ育った彼らは、中国の一部となった今、自らのアイデンティティーを一時見失ったこともある中で、香港にも伝統的な集落が現存していることに着目し、これらの調査・研究をすすめるながら、新たな文化遺産として見つめていこうとしています。香港の観光といえば、林立する超高層ビル群とブランドショップを思い浮かべますが、ちょっと離れば伝統的な集落が今も残っています。ただ、これらを観光資源とするには、その文化的、歴史的背景を知らなければわかりません。また、香港の中心市街地のように、観光客がどっと押し寄せる場所ではありません。奈良のケースでは、東大寺の大仏さんのように、数多くの観光客が訪れる観光を「マス・ツーリズム」と呼び、観光の主流となっています。これに対して、「奈良町」は、町の成り立ちや伝統的町家の知識が無いと楽しめないでしょう。地域の文化についての知識を学んだ上で楽しむ観光を「カルチャー・ツーリズム」と呼び、奈良はこのタイプの観光の推進にもっと力を注いでいくべきではないかというのが彼らの提言です。香港でも、半ば忘れられていた伝統的な集落・町並みをその生活文化も含めて保存していくことが、香港のアイデンティティーの確認にも重要なことです。短い研修期間でしたが、10月末に奈良で「香港と奈良における持続可能なツーリズムを考える」をテーマに、フォーラムを持つことができ、伝統的な町並みを活かしたまちづくりについて、国際交流を深めることができました。奈良まちづくりセンターでは、このような交流をこれから国内外各地域と進めていきたいと思えます。

より政策形成の質を高めるため、地域政策協定を結びました

山下 真 (生駒市長)



はじめまして、生駒市長の山下真です。
本年6月29日に、「真に自立したまち」をめざす、生駒市長の挑戦～地方自治体の首長に求められるリーダーシップとは～との題で講演させていただいたご縁で、去る9月10日に貴大学と「地域人材育成に係る相互協力に関する協定」を締結し、本市職員が学ぶ機会をいただくことになりました。
貴コースでは、大学院生やNPO職員の皆さんと自治体職員が各々の立場で多様化する地域ニーズへの対応を議論することから、我々自治体職員にとっては新しい気づきの場となるのみならず、ともすれば前例にとらわれがちな思考を柔軟にし、政策形成能力を向上させるきっかけになるものと考えております。
さて、ここで生駒市について少し紹介させていただきます。
本市は、奈良県下で3番目の12万人を超える人口を有する住宅都市であり、昭和40年代後半頃から大阪圏のベッドタウンとして発展し、平成23年11月に市制40周年を迎えました。
平成18年に私が市長に就任した後は、「関西一魅力的な住宅都市」をめざし、最少の経費で最大の効果が発揮できるよう、行財政改革を積極的に進める一方で、子育て支援、福祉、医療、環境、企業誘致など、将来の発展の礎となる事業を積極的に展開してまいりました。また、公平、公正で透明な行政運営を確立し、市民の信頼を確保するとともに、市民の市政への関心を高め、市政への参加も促してまいりました。
その結果、全国の都市を対象とした今年度の「住みよさランキング」(東洋経済新報社)では関西第5位、また、昨年度の「安心・安全な街ランキング」(同社)では三大都市圏を含む都市型自治体でトップの評価をいただいております。
これらの結果を素直に喜ぶとともに、今後もより大胆な改革や新規事業の立ち上げを行い、常に先進的、先導的な自治体を創造していかなければならないと考えています。
最後に、このたびの貴大学との「地域人材育成に係る相互協力に関する協定」により、大学院生やNPO職員の皆さんと、本市をはじめとした自治体職員との協力関係が構築され、多様化、高度化する住民ニーズに応える創造的な取り組みが生まれたいことを強く期待しております。

修士論文執筆記 (アンケートから)

修士論文執筆の苦しみ、喜びの余韻がまだ残っている 2012 年度修了生の 4 人の方に、現役生に向けアドバイスをいただきました。

Q1. 修士論文執筆にあたっての苦労やコツについて教えてください。

Q2. 修論執筆中の後輩へのアドバイスをお願いします。

Q3. 修論執筆のスケジュールを教えてください。

point! 夏休みまでに書く実感をつかむ

田中宏典さん (2012 年度修了)

- A1. 夏休みまでに現地調査や関係機関へのヒアリングを実施しました。これを題材とした 1 万字の執筆を指導教諭より夏休み期間中の課題として与えられました。これが、書く実感と自信を植えつけていただくことになり、大変良かったと思います。また、これを加筆・修正することで本文に利用できたため、書く上でのアドバンテージにもなりました。
- A2. 春休みや夏休み等の早い段階で 1 万字程度の原稿を書いてみてください。書くことの実感を掴むことができ、また、書ける自信にも繋がられると思います。Word2007 の操作に困ったときは、InfoFukakusa (<http://www.media.ryukoku.ac.jp/kyoto/index.html>) にアップされている『卒論のための Word2007』が役立ちます。
最後に、修士論文の提出にあたっては、定められた書式で作成されていないと受け付けてもらえないので注意が必要です。
- A3. 2012 年 7 月～8 月 現地ヒアリングを実施
2012 年 9 月 夏休みの課題として 1 万字分完成 (のちに第三章の基となる)
2012 年 11 月上旬 序章 完成
2012 年 11 月下旬 第一章 完成
- 2012 年 12 月上旬 第二章 完成
2012 年 12 月下旬 第三章 完成
2013 年 1 月上旬 終章と政策提言 完成
2013 年 1 月中旬 図・表の挿入と全体校正、要旨作成
2013 年 1 月 21 日 完成 提出

point! いかに削ぎ落とすかがポイント

小林美智子さん (2012 年度修了)

- A1. 「客観的な根拠に基づいて何かを解明すること」が論文の目的ですが、私は自ら抱える課題をテーマとしたので、エッセイ的になってしまったことは否めず、反省すべき点です。
担当の先生とは月 1 回定期的に面談時間を取っていただき、次の面談までに少しでも前に進めるよう自らノルマを課すようにしていましたが、論文提出の時期と自分自身の選挙とが重なり、1 月はほぼ徹夜状態でした。これは想像以上に大変でした。早め早めに進めることが大きなポイントだと思います。
- A2. 研究を進めるにつれ、あれもこれもと書きたくなると思いますが、設定テーマから逸れていないかを確認し、いかに削ぎ落としていくかが大切だと思います。最終の追い込み、寒い時期ですので、知力、気力、体力で乗り切ってください!
- A3. 2012 年 9 月 はじめに 第 1 章
2012 年 11 月 第 2 章 第 3 章
- 2012 年 12 月 第 4 章
2013 年 1 月 第 5 章 おわりに

point! 耳に痛いことを聞くことの勇気

岩本陽子さん (2012 年度修了)

- A1. 自分の書きたいこと=論文ではないことを理解し、どうすれば研究になるかの模索は初めの大きなハードルでした。私はそれらを乗り越えるために「市民教育の推進になる研究がしたい」という目的が変わらなければ良いと、初めに設定したフィールドを変更しました。あとはどんな切り口や手法で、どの範囲まで触れるか等、決断をしなければならぬタイミングで決断をするということが辛いですが大事だと思います。時にこだわりを捨て、耳の痛いことを聞くことも勇気、頂いたアドバイスや知った情報の中からどれを取り入れるのか取舍選択も勇気が要ります。
- A2. 本コースには色々な分野の先生方がいるのが強みです。研究の種のほりおこし、研究にするためのベースづくり、分析等それぞれにお世話になりました。前が見えないとしんどいですが「何のための研究か?」を思い出すと励みになると思います。同期生とも励まし合いながら、良い研究ができることを祈っています!
- A3. 2011 年度 研究計画作成、参考文献を読む、集めた資料で仮分析
2012 年 4～5 月 これでは研究にならないと指摘を受け、悩む。フィールドを変更
2012 年 5 月 新たなフィールドへ研究協力をお願い。テーマとなる事業の観察、資料収集開始
2012 年 6 月 事業参加者の感想文をデータ化 分析の下準備
2012 年 7 月 ヒアリングをする人の選定。ヒアリング開始 参考にした団体へ訪問
- 2012 年 8 月～9 月 ヒアリング終了 感想文の分析 1 章 2 章の下地づくり
2012 年 10 月 ヒアリングの分析手法に悩む 感想文をメインで扱うのをやめることにした。
2012 年 11 月 ヒアリングの分析 核となる分析は終了
2012 年 12 月 大枠の完成 中間発表を受け、まとまりがあるように情報の取舍選択
2013 年 1 月 細かい部分の修正 提出

point! 考える時間と作業する時間を使い分ける

千代苑子さん (2012 年度修了)

- A1. 各先生方からの指導・助言を受けて考えた内容は細かに指導教官へ報告・相談し、さらに発展的な議論へと展開することができました。また、執筆前に各章 100 字程度で概要をまとめたことは、その後の執筆において大いに役立ちました。着々と前へ進めるために「考える時間」と「作業する時間」を区別して使い分けていたことも重要であったと思います。
- A2. 私の場合 1 つのテーマに向き合い全力で取り組むことはその後の自分自身の「軸」を形成することに繋がると考え、最後まで楽しく走り続けることが出来ました。時間をかけて、あるテーマについて深く考えた日々はとても贅沢な時間であり、今の原動力にもなっています。現在執筆中の皆さんにも是非存分にその時間を活かして、指導教官としっかりコミュニケーションをとり合いながら頑張ってもらいたいです。応援しています!!
- A3. 2012 年 9 月 現地滞在リサーチ (約 1 ヶ月)
2012 年 10 月 関係者へのインタビュー
2012 年 11 月 序章・第三章の執筆
- 2012 年 12 月 第一章・第二章の執筆
2013 年 1 月 結章の執筆

《《 3つの報告 》》

アメリカ・コミュニティ財団の動向調査から

深尾昌峰（政策学部准教授）

10月17日～10月22日までサンフランシスコとポートランドに調査に行ってきました。今回の調査目的は主にコミュニティ財団の動向を把握すること。いくつかのコミュニティ財団を訪問する中で、アメリカの寄付市場も大きな転換期を迎えつつあるということがよく分かりました。インターネットをはじめとする情報化の進展と共に「アメリカンドリーム」が変容する中で、例えば世代別の寄付動向も大きく変化し始めているようです。財団側も変化に対応するためにファンドレイザーに求める専門性も変化させており大変興味深かったです。

また、ポートランドはファーマーズ・マーケットが有名ですが、それ以外にも農を核とした地域づくりの現場にも足を運ぶことができ、実り多い調査でした。



JICA 集団研修「地方行政強化（参加型地域開発）」から

龍谷大学政策学部地域協働総合センター地域連携フェロー
河村能夫（名誉教授）

今年も7月30日～9月20日の8週間、龍谷大学はJICA 集団研修「地方自治体行政強化（参加型地域開発）」を実施しました。参加は途上国13ヶ国から、地方行政に携わる行政官17人。この研修は、インドネシア・南スラウェシ州で実施したJICAプロジェクト「貧困軽減のための農村計画」（1997～2002年）の経験に基づき、2003年から毎年実施し、今年で参加者数は200人を超えました。

従来の研修プログラムとの違いは、実際に課題解決のプロジェクト形成に結びつく研修という点です。研修生は、来日前に課題解決するためのプロジェクト企画案を準備し、本研修プログラム中にブラッシュアップし、それを自国で実際にアクション・プランとして実施することが要求されています。研修員たちは「日本の地方自治体行政のシステムと地域住民活動」と「参加型地域開発のための地方行政のあり方に関する理論と方法」について学び、その成果を自国の発展に役立てることが期待されています。



龍谷大学院 NPO・地方行政研究コース 10周年記念シンポジウム 地域公共人材の挑戦一枠を超え、今を越えるー

記念シンポジウムは12月7日に開催されました。OB・OGの皆さんも数名出席され、シンポジウムの後はさながら同窓会の趣きでした。なお、10周年記念誌も刊行されました。詳しくは次号で報告します。



海外フィールドワーク 報告

インドネシア調査

9月に海外フィールドワーク（途上国）を履修し、インドネシアに調査に行ってきました。私の研究は「日本で一年間、農業や保健衛生の研修を受けた研修生が帰国後成果を出しているのか否か」、それを明らかにするための調査の枠組みの考察です。今回はテストランとしてインタビュー調査（14名中8名達成率72%）、アンケート調査（同100%）、フォーカスグループディスカッションという3つの調査を実施して来ました。現在はその結果を研究に反映するために苦しんでいます。今までの業務での調査とは違った結果が出ていると感じており、私の拙い調査の枠組みにご指導いただいた土山先生、特別演習の先生方や共に学ぶ仲間へ感謝しています。

（坂西 卓郎 政策学研究科）



元研究生にインタビューをしている様子

あの人は今

学生に戻りました！

元事務局／同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士後期課程 榎並ゆかり

在任中は大変お世話になりました。現在、院生として「アフリカン・ムスリムのトランスナショナルな移動に伴うネットワーク」に関する研究をしています。セネガルのムリッドといわれる人びとを対象に、本国と移動先の広州・ドバイ・ニューヨークとの間に構築されたビジネスと宗教のネットワークの中で女性たちが果たす役割を中心に調査中です。院生として、久々にアフリカのフィールドで研究の楽しさを満喫したのも束の間、論文執筆に取りかかっただけは眠れない日々が始まりました。論文執筆を鶴が自らの羽を抜いて機を織る痛みに例えられた研究者の言葉を思い出します。現役生の皆様、苦しみの先にある達成感を信じて共に頑張りましょう。



写真右が榎並さん

事務局インフォメーション

●修士論文提出締切

2014年1月21日（火）時間17:00

●政策学研究科

海外フィールド研究・修士論文・課題研究報告会

日時：2014年3月8日（土）13:00～

場所：龍谷大学深草学舎22号館 104・105教室

●法学研究科 修士論文・課題研究報告会

日時：2月下旬～3月下旬

●修了証書授与式

日時：2014年3月15日（土）10:30～

場所：龍谷大学深草学舎顕真館

NPO・地方行政研究コース ニュースレター「グローバル通信」通巻31号 2013年12月

発行／龍谷大学大学院 NPO・地方行政研究コース

連絡先／政策学部教務課

TEL：075-645-2285 FAX：075-645-2101

H P／http://www.ryukoku.ac.jp/gs_npo/

編集／片岡華絵、千葉有紀子、竹本真梨

編集補助／中西美也子

監修／大矢野修、松浦さと子、土山希美枝、的場信敬

印刷／株式会社 田中プリント